

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail square@kohitsuji.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：S R S株式会社

定 価：一部 30 円

2014年 2月 20日

第 369 号

### 底辺から国をつくる

理事長 稲松 義人

「底辺」というと、特別に虐げられた人たちを想像するかも知れません。一般的には「生活者の立場から国をつくる」とした方が受け入れやすいような気がします。しかし、社会福祉の仕事をしていると、それも地域でさまざまな支援を必要とする人たちに出会うとき、彼らの置かれている状況は「底辺」と言ってもいいのではないかと感じるのです。多く

しかし、今は世界を見ても日本の社会を見ても、力をもって統治する（平和を維持する）という発想は、限界にきているのではないかと感じています。

の人は、そんな中でも精一杯生きようとしていると思います。しかし、時に耐え切れなくなってしまう人もでてきます。実際の状況の深刻さの軽重よりも、その人の生きる力によって限界は違ってくるようにも思います。案外、表面的には平静を装っていても、あるいは自分自身で自覚していなくても、限界ぎりぎりのところで生活している人は多いような気がします。まさに現代日本は、ストレス過剰社会だと感じます。

非暴力によって変革をなした人物として、マハトマ・ガンジー、キング牧師、先日なくなつたネルソン・マンデラらが思い浮かびます。手法として考えると、「権力によって統治する」のではなく、「忍耐をもって調整する」と言えるような気がします。調整には時間がかかります。しかし、それぞれの違いを超えて、同じ社会で、同じ地球とともに生きていくために、どのように協調していくかということに人類の英知は用いられるべきだと思います。

「国をつくる」というと、国を統治するというイメージをもつ人がいるかも知れません。今年の大河ドラマは、日本を統治するために混乱した戦国時代が舞台です。平和を思いつつも統治するためには闘いがあり、犠牲もあるが、国づくりのために、賢い人材と優れた戦略が必要だといいたいのかも知れません。

平和憲法と言われる現在の日本国憲法は、その点で世界の手本になる思想性をもっていると思います。戦争の悲惨さからの反省に立って、日本が立てた国民の誓いです。現在の日本のリーダーは、経済回復の成果をちらつかせながら、力によって日本を治めようとしているように思えてなりません。福島第一原子力発電所の事故によって反省させられたことも、経済的な豊かさを求めて集まる巨大都市の電力を賄うために、経済的にハングリーのある地方に経済の見返りとして

原発が建てられたこと、経済という力によってその負の部分（弱い立場の人）に押し付けてきたのだと思います。今も原発事故の収束のために、危険な環境で働いている人たちがいます。この事故を収束させるために、過酷だと知りつつも誰かが働かなければならないのです。明確な方法も見えない「最終処分」への果てしない道のりを、誰が命を削り重荷を負って歩くのだろうかと思ふと心が痛みます。それは、私たちの子孫のなかの誰かが何代にもわたって負わされることは確実です。時の権力者たちは、また、力のない人たちの人生を金で買って、力によってそれをさせようとするのでしょうか。

小羊学園の歩みは、立てられた小さな地域での小さな実践ですが、障がいのある子どもたちとその家族、その周囲にいる人たちが小さな力を寄せ合って、ともに生きていくことで平和な社会をつくることです。自分たちさえ平和であればよいというのは、閉鎖的なムラ社会です。周りの共同体にも心を開き、違いを超えて、理解し合い、ともに生きていくために調整していく中で平和な国ができるのではないかと思います。これは、力のない底辺の人たちのもつ課題に寄り添い、ともに解決していこうとするソーシャルワーカーの精神に通じます。他者のいのち、人生に関わる者として、常に謙虚であり続けるために、スーパービジョンの役割をするのが、私の場合、聖書です。

# 小羊学園研究発表会 優秀賞発表報告

小羊学園では、毎年2月に法人研究発表会を開催しています。利用者理解をテーマに日頃の支援の取り組みを研究・報告しています。今年も6事業所の発表があり、障がい理解に関し様々な視点で発表がありました。審査員は聖隷クリストファー大学の大場先生にお願いし、最後に講評もいただきました。

## 本人の『動き』に寄り添う

つばき静岡 片山 史哉

### 事例紹介



- ①対象者：F.S様 33歳 男性
- ②診断名：脳性麻痺 重度知的障がい てんかん

③運動機能：歩行器利用しての介助歩行、支え立ち可。自力座位(正座、体育座り)可。見守り必要。上肢機能は物を把持することが可能だが有為な使用しない。

④聴覚・視覚：視覚は明暗のみ。聴覚は正常。

⑤表出：Yes/No表出はつかめていない。不快は自傷(おでこを叩く、手を噛む等)、発声で表す。自傷が全て不快ではなく、自傷することで刺激を入れていることもあるため、不快かどうかの判断は難しい。

⑥コミュニケーション：言語なし。その他の要求、訴えるサイン等は自傷以外の

になし。

⑦興味・関心：プール、足浴等の水遊び。手に当たったものを掴む。

⑧食事：全介助。偏食。食べ始めに時間かかり、好みの物でないと開口しない。水分摂取は牛乳を好む。本人の健康状態やその時の本人の好んでいるものによつて受け入れるのが変化する。

### 課題

#### 課題

視覚が弱く、コミュニケーション手段が乏しい、また理解度が不明なため、本人との意思疎通が取りづらい。  
現在の生活環境や日中活動等を本人がどう感じているのか検討することで、本人の気持ちに近づけるのではないか。

### 経過

- ・ 本人の様子、生活場면을撮影しモニタリングする。
- ① 介助歩行
- ② 音楽療法
- ③ 食事介助

#### 経過

- ・ 本人の様子、生活場면을撮影しモニタリング  
①介助歩行 ②音楽療法 ③食事介助
- ・ 撮影した内容をカンファレンス
- ・ 受け入れやすい環境や関わり方等を検討

・ 撮影した内容を現場職員でカンファレンスし、本人が職員の関わりに対して

### 評価

#### ① 介助歩行

リハビリによる介助歩行は5分程のストレッチ等の導入を行い、身体をほぐしていた。本人はその時間に歩くための心の準備をしていたのではないか。リハビリの介助方法は本人の動きを阻害せず、自発的な動きを促している。

本人の歩行に対する取り組みは介助方法によつて違うことがわかった。本人に歩行へ気持ちを向けてもらう働きかけをし、動きに合わせて介助する方法は受け入れやすいのではないか。

#### 評価【介助歩行】

- ・ 自発的な動きを促し、本人の動きを阻害しない
- ・ 介助方法によって本人の動きが違う
- ・ 本人の動きに合わせて介助する方法は安心できるのではないか

② 音楽療法

音楽療法は外部から音楽療法士の講師を招き取り組んでいる。講師は本人とツリーチャームを介して、関わる中で本人の様子を窺いながら次のアプローチをしていた。講師は本人の行動を意思の表現として捉え、本人とやりとりをしていた。その行動は偶然なのかもしれないが、表情の変化等を見逃さずに本人と関わっていた。一つ一つの行動に気持ちの移り変わりを感知取ることは本人のペースに合った関わり方なのではないか。

**評価【音楽療法】**

- 表情の変化を見逃さない
- 一つ一つの表出に気持ちの移り変わりを感知する

③ 食事介助

本人にとっても、職員にとっても食事は苦勞している。

食事中は発作を誘発しやすい傾向にあり、不快な表出が出やすい事も考えられ、本人の表出の意味が判断しづら

**評価【食事介助】**

- 好きなものは食べて、嫌いなものは拒否する
- 食べる時も興奮がみられる
- 食に関しての関心が薄い
- 食事の時間が不快と感じているのでは

場面でもある。

食事では本人が好むものは食べて、好まないものは拒否または、口から出す。食べるものは毎日どのタイミングでも食べるのではなく、本人のタイミングによって食べないこともある。食事を食べる必要に問わず、食事中に興奮することが多くあった。食に関しての関心も薄いため、介助方法に関わらず本人にとつて食事の時間は不快なのではないか。

考 察

介助歩行では気持ちを向けてもらう働きかけをするとともに、本人の身体的な機能を理解し、動きに合わせて介助することが本人の安心となり受け入れ

やすいのではないかと考えた。

音楽療法の場面では、本人の表出を意思の表現であると仮説をたて、本人とやりとりすることで、気持ちの移り変わりに気づき、本人のタイミングで関わる事ができるのではないかと考えた。

食事の場面では、いままですら食事を食べてもらうことに試行錯誤していたが、食事に向かうために気持ちを向けてもらう働きかけをすることが必要なのではないか。

**考察**

- 気持ちを傾けてもらうための働きかけをし、身体的な動きに合わせて介助する
- やりとりで気持ちの移り変わりに気づく
- 食事に向かうための働きかけが大切なのでは

反省、課題

本人に活動提供や介助の際に、視覚的な情報が乏しい分、触覚、嗅覚、味覚等、本人の出来る限りの感覚で情報を伝えるよう関わっていた。しかし、本人と

やりとりをし、心の準備をしてもらう事も大切である。

今後、食事の時間が本人にとって不快なままではなく、少しでも受け入れやすい環境を整える為には、食事を摂るにあたり、本人に心の準備をしてもらう事が大切であると考える。手洗いをする事で、本人の気持ちが食事に向かう時間に出ればと考えている。

**反省**

視覚的な情報が乏しいため、他の感覚に働きかけていたが、本人に気持ちを傾けてもらうための働きかけをし、『動き』に合わせて寄り添うことも大切なのではないか

**今後の課題** ～食事の時間を受け入れてもらうには～

- いまから食事が始まることを本人と確認し合う
- 本人に心の準備をしてもらう
- 手洗いの時間の関わりで食事に気持ちを向けてもらう



第2ドルチェ スタートします

平成17年に南区江之島町「アンサンブル江之島」内で開設した放課後デイサービス「ドルチェ」が、利用ニーズの拡大に伴い、この度新しい拠点を整備することになりました。

新事業所はドルチェから北へ約3km離れた南区参野町の事務所をお借りし、26年4月からスタートいたします。名称は「第2ドルチェ」とし、定員10名で障がいのあるお子さんの放課後や長期休暇の支援にあたります。スタッフは、ドルチェの経験をいかした職員が配置され、また相互の連携も図っていく計画です。



グループホーム すずらん 竣工間近

三方原地区4カ所目となるグループホーム「すずらん」が完成間近に迫っています。元小羊学園青年寮長の故大胡静子先生宅をお借りし、ケアホーム「あゆみホーム」として事業を行っていましたが、建物の老朽化もあり、解体・新築工事を行っていました。4月末の完成を目標に工事が急ピッチで進んでおります。

※障害者総合支援法の改正でグループホームに一元化され、平成26年4月よりケアホームの名称は無くなります。



日本財団からリフト付き軽車両の補助を受けました

支援センターわかぎ

支援センターわかぎでは、利用者の受診や外出等に必要なリフト付き軽車両が必要となり、車両の整備を考えておりました。日本財団に補助申請・受認され、納車となりましたので、ご報告いたします。紙面をお借りして、日本財団に厚く御礼申し上げます。

- ①補助車両 ダイハツハイゼット（リフト付き）
- ②車両価格 1,098,000円
- ③補助額 870,000円
- ④納車日 平成26年2月12日



小羊学園を支える会

2013年度寄付金報告

1月受付分	481,427円 (38件)
累計	5,665,372円 (355件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座	00800-8-107785
口座名義	社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店	当座預金0107785
口座名義	社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。小羊学園を支える会事務局（鈴木）三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

編集後記

支援センターわかぎの全面改築工事の完成が近づいてきている。1年間、仮設生活で苦労した利用者の顔は、新しい建物に引越せる期待でワクワクした表情をしている。ご苦労をかけた以上に楽しい生活になるよう努力したい。ご近所の皆さんにもまたご苦労をお掛けしている。工事の音であったり、大型車両の出入りであったり。ご近所の皆さんにも、これから良いお付き合いができるよう自治会に加入させていただきよう願いたい。この平口の地で、みんなが幸せに暮らせることを願ってやまない。

春の気配が感じられます。どうぞ皆様お身体ご自愛ください。(F)